

我
が
邑

小
野
路
紀



我が邑「小野路紀」に寄せて

中島典高

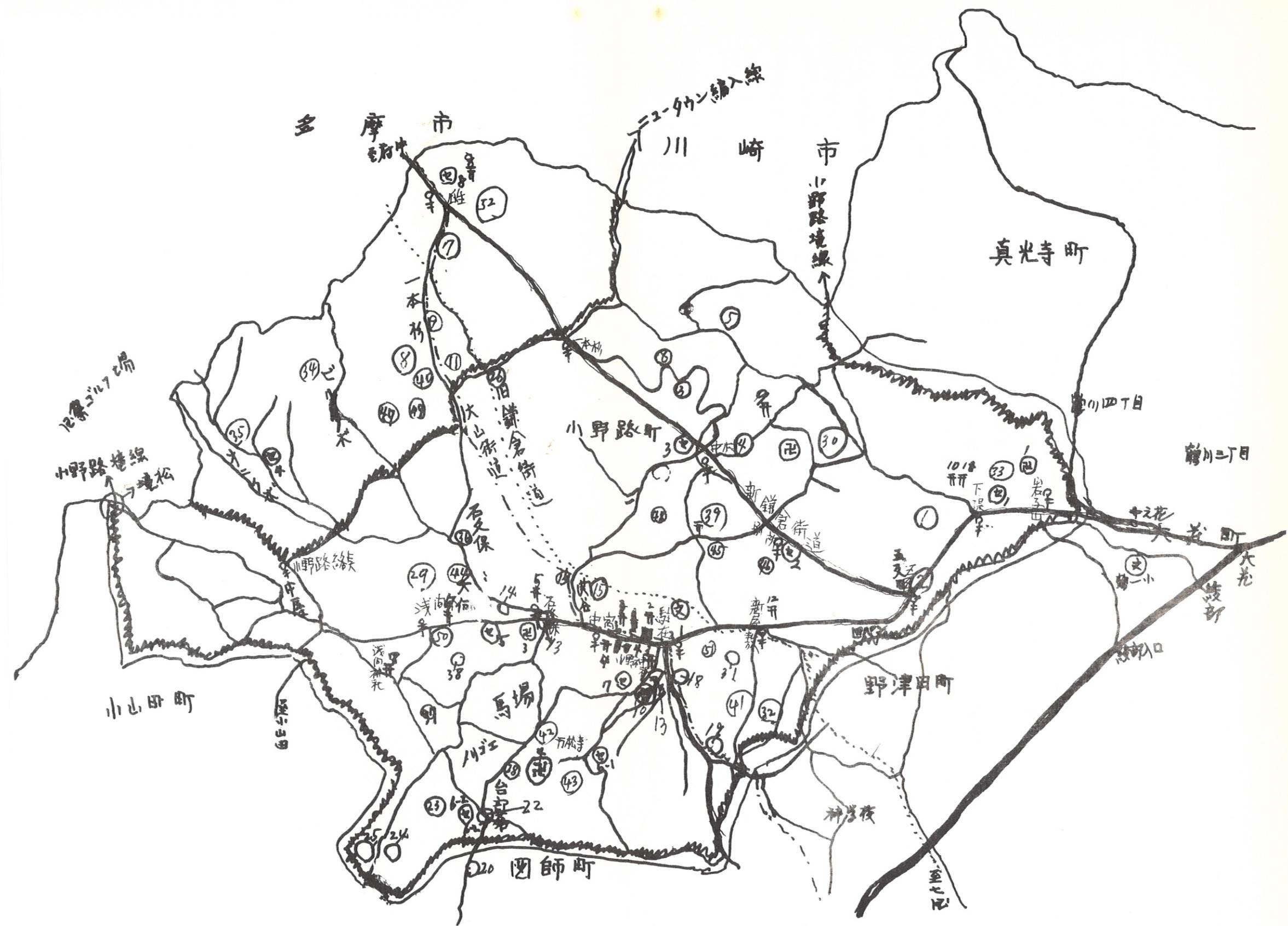
縁あって、緑の美しい、こまやかな人情の花咲くこの地、鶴川に職を奉じてはやくも五年。その間、数多くの友人、知己に恵まれたが、そのひとり、わが畏友、萩生田長吉氏が「我が邑・小野路紀」なる小誌を刊行するという。序を乞われるまゝに、一読してその内容の豊富さ、おもしろさに驚嘆する。小野路の地名から発して、神社・仏閣・史跡・伝記に至るまで、小野路に伝わるありとあらゆる話が網羅され、よく調査されて集大成されている。読み進むにつれて、何にもまして切々と胸を打つものは、郷土「小野路」へ寄せる著者の愛情の深さである。小野路の由緒ある家に生れ、小野路の自然にはぐくまれて育った氏が、史跡に託して高らかに歌い上げたふるさと「小野路」への愛の讃歌である。

再読してみて、惻々として心にせまるものは、著者が、ふるさとの失なわれゆく古きものに寄せる愛惜の情であろう。曾っては、秘境の観を呈したであらう小野路の自然も、都市化や宅地造成の波に洗われ、もろくもくずれさろうとしている。小野路を愛することにかけては人後に落ちない氏が、そことこの野仏に、お地蔵様に、また野辺の道しるべや一本一草に対しても、こまやかな愛惜の情をこめて歌い上げた「ふるさと小野路」への挽歌である。

この小誌を読み終えて、いつまでも読者の心に残るものは、世の心なき人々に対する作者の純朴な怒りである。小野路をこよなく愛する氏であるからこそ、血肉を分けた思いのふるさとの貴重な文化財が、心なき人に持ち去られ、荒らされていくことを黙過できず、声を大にして警告を発し、苦言を呈しているのである。もつと言えば、「物で栄え心で亡ぶ時代」と言われる現世への警鐘の書であるといえよう。

ともあれ、この小誌は、たぐいまれな郷土の篤志家になる貴重な書であり、言つてみれば、「小野路の風土記」であり、「小野路の紀記」である。この小誌の刊行によつて、小野路を知る上で最も手がかりの書を得たわ

けである。それは、郷土「小野路」の人々にとつてのみならず、鶴川の人たちや、広く町田市民にとつても貴重な記録になるにちがいない。また、小野路散策に、郷土の史跡めぐりや歴史散歩の折の最適の書となることを確信しつゝ、わが友、萩生田長吉氏の力作、「わが邑・小野路紀」の刊行を心からよろこぶものである。



地図記号説明

八セイノ神								
神社 丹								
升 7	升 4	升 1	升 4	升 1	升 4	升 1	升 4	升 1
浅間神社 (大向)	浅間神社 (大向)	小野神社本宮 (宿)	天満宮 (中宿)	日吉神社 (石久保)	稻荷神社 (瓜生)	稻荷神社 (瓜生)	稻荷神社 (瓜生)	熊野神社 (別所)
八久保								
七沢								
旅籠 (六タゴ)								
十二谷戸								
小野山万松寺 (万松寺谷戸)								
河内屋								
岩子山千寿院 (下堤)								
別所山東光寺 (別所)								
松寿院 (大向)								
1	2	3	4	5	6	7	8	9
米屋	角屋	福島屋	池田屋	煙草屋	河内屋			
藤ノ沢 (大向)	栗ヶ沢 (別所)	30	31	クグツ沢 (新屋敷)				
半沢 (向坂)	32	33	34	35	36	37	38	39
ピリ久保	オニ久保	34	35	36	37	38	39	40
女郎久保 (大向)	38	39	40	41	42	43	44	45
小孤久保 (新屋敷)	41	42	43	44	45	46	47	48
沢の谷戸 (万松寺谷戸)	42	43	44	45	46	47	48	49
長谷戸 (別所)	43	45	46	47	48	49	50	51
細谷戸 (別所)	44	46	47	48	49	50	51	52
ケゾウ谷戸 (新屋敷)	45	46	47	48	49	50	51	52
下堤	別所 (寮下)	別所 (寮上)	台	下宿	下宿	台	下宿	下宿
大向	② 6-1	万松寺谷戸	④ 6-1-2	⑤ 7	⑥ 8	⑦ 8	⑧ 8	⑨ 8
小野神社本宮 (宿)	升 2	子ノ神社 (下宿)	升 3	諏訪神社 (中宿)				
天満宮 (中宿)	升 5	日吉神社 (石久保)	升 6	稻荷神社 (大向)				
稻荷神社 (瓜生)	升 8	稻荷神社 (瓜生)	升 9	熊野神社 (別所)				

開 13 10 日吉神社（下堤）開 11 熊野神社（下堤）開 12 八満神社（新屋敷）

下堤 富田屋 島野氏方

日吉神社（向坂）

三暖（サンヌク）

別所 中村 大沢氏方

万松寺谷戸 日向 小林氏方

向坂上 一里塚辺

三寒（サンサム）

下堤 湯舟辺

土橋

ソウメン坂（別所）

貯水場（別所）

小川源之助氏方

ヤキ場（土橋）

一本杉

ソマ捨場（土橋）

辻

道祖神

子育地蔵（石久保）

日限地蔵（向坂）

一里塚

合ノ道（宿）

台部落

日限地蔵（向坂）

小町井戸（万松寺谷戸）

コウセンバ

城山

町田市天然記念樹（台）

小島資料館（宿）

家名では、東、宮坂、油屋、中屋、半沢、万充屋、角屋、辻、日陰、日向、サンノ山、迎

（ムケエ）、隠居、新宅、新屋等種々ある中でも面白いのは、鎌庄さんの富さんとか、亀

ようさんの儀つさん等と言うのがある。

鎌さんの子が庄太郎さんでその子が富さんなのである。又亀さんの子が和吉さんなのだが

地名

其の他

この人の事をようちやんと呼んでいた。そのようちやんの子が儀一さんなのである。こうした三代もの人の名をつづけて呼ぶのは珍しい事であるが、今だにこう呼んでいる人もある。

又、昔は家名で人を呼んだり、谷戸名を家名にして呼んだりしていたものだった。

地図が小さいので数字を入れたのだが又、数字も入れにくい所があるので、その近くに数字を入れたので多少の違いがあると思います。御了承下さい。

我がふるさとの小野路を想う

私達の小さい頃年寄り達に聞かされていた言葉に、「野暮の山崎、道樂野津田、小野路は名所で花が咲く」と云う事があつた。これは山崎が野暮で、野津田に道樂者が多かつたわけではないと思う。小野路に生まれ、小野路に住んで育つた子供達に、小野路の良さ小野路の誇りを自覚させ、郷土に対する愛着と生甲斐を植えつけようとした誇張した教えたと今になつて感じているのである。

自分の土地を愛し、我が郷土を誇りとする気風は、我が小野路だけの特産物ではない。いかなる山間僻地でも、人間の渦巻く都会の真中でも此の気持に変りはない。郷土を誇り、他に優越を感じていればこそ、自慢話に花が咲くのである。どんなに些細な事でも、他に勝つていればそれが自慢の種になるのである。他所より米の五升か一斗も多く穫れる田圃を持つてゐる事も、大根や人参のよく出来るのも、家の日当りのいい事、風の余り当らない事、水のいい事、そんな事でも自慢になるのである。

そこで私は小野路に生まれ、小野路に育つたのであるから、小野路の自慢話をしようと思う。しかし、私も六十何年小野路で息をしていても、小野路のすみずみまで知つてゐる訳ではない。だから私の話は

小野路のすべてではない事をはじめに断つておく。私の知らない事は他の人が自慢する事であろうから。

小野神社



小野路には小野神社というお宮様がある。小野路に住む者の氏神様であり、生産様であり、小野路に住む者はみんな氏子であり、小野路区民の信仰の的であり、よりどころであったのである。

私の祖父が嫁を貰つた時、紋付袴で短い刀を一本差して御参りに行

つたとかで、その刀が大事そうにしまつてあつたのを思い出す。

戦前、「八紘一字」とか、「撃ちてし止まん」とかの精神を以つて戦勝祈願をするとか、何か事ある毎に氏子一同揃つて参拝したものだつた。

元日の午前〇時になると元旦参りと云つて、大みそかの十二時になると家の者達揃つてお参りに行つたものだつた。早く行つたつもりでも、其の時はもう十何本かのローソクが上がつてゐた。其の時は必ず日限地蔵にもお参りしたものである。

終戦と同時に、米軍マッカーサーの支配下におかれ、自由主義とか民主主義とかいつて、世の中がひっくりかえつてしまつた。当にしていた神風も吹かなかつたし、願つていた事や、信じていた事も一つづつはぎれてしまい、神様の信用度もうすくなり、お参りに行く人もだんだん少なくなつてしまつた。当時は、マッカーサーの云う事は何でも聞かなければならない状態だつたので、マッカーサーは神様より偉いとされた。

しかし、そのマッカーサーが大統領に首にされてしまつた。それを神様の罰につなげてみるのも面白いと思う。

此の様に小野路のアイドルだつた小野神社には、小野篁を祭神として祀られているのである。小野篁は平安の頃の歌人として有名だつたそうであるが、日本の三大書家として有名な小野道風の祖父とか聞く。小野道風は書を始めたがどうしてもうまくならない。天分がないのだろうから止めてしまおうかと随分悩んだそりであるが、或る時、雨のそぼ降る午後傘をさして、池のほとりを通ると、一匹の蛙が柳の枝に飛びついていた。落ちては又飛びついている。しばらくして、何十ペんかの後とうとう飛びついてしまつた。この有様を見ていた道風は、自分の努力の足りなさを悟つたと云う有名な逸話が残つてゐる。

先だつて或る本を読んだ時、小野路の地名の事について面白い事が書いてあつた。厚木に小野の里と云う所があり、昔そこに国府が置かれてあつたのだそうだ。そして、府中に小野ノ宮と云う所があるので、そ

こにも国府が置かれてあり、共に京から役人が来て治めていたのだそうだが、その厚木の小野ノ里から、府中の小野ノ宮に行く途中の道だから小野路と名が付いたのだろうと書いてあった。面白い発想だと興味深く感じたのだった。小野天皇もここを通り、大変にいいところだと云っていたそうである。天皇の死後氣に入っていた小野路に、六代目の子孫が小野神社として祀つたとかの事である。

小野天皇と云う人を百科辞典でみると八〇二年とあるから、千五、六百年前の人だと思う。平安の初期の人で小野の峯守と云う人の子であり、葛絞と云う子があり、好古と道風との孫があつたそうである。天皇は歌人で名高く、我々がカルタ取りに使う百人一首の中にも含まれていて、

「和田の原八十島かけてこぎ出でぬと

人には告げよ天のつり舟」

と天皇は詩つている。首名三位天皇としてあり、百人一首の六〇番目にランクされている。又歌と共に漢詩にも長けて居り、明國に赴いた折、明国人と通訳なしで応待が出来たとの事で名高い話だそうである。

余談になるが、孫の道風は名筆家として世に知られ、三蹟と云われ今でも、その書が残っているそうである、因に三蹟とは藤原佐理、藤原行成と小野道風の三人だそうである。又平の将門の時分、公卿であつた純友が四国邊で海賊をやつて居つたのを討伐したのが兄の好古だそうである。

この小野神社というのは、小野の宮にも小野神社があり、一ノ宮にも小野神社があり、どっちが本当か今だにわからぬらしい。両方とも本当かも知れない。小野の宮が昔は多摩川がもつと北の方を流れていた時分、大水が出るとよく流されるので、一ノ宮に遷したのだが、其の後、又持つて行つたと云う説もあり、又別の意見では、大水の時、時の神主が地の中に入れておいたのを出して祀つたとか、昔の事で書いたものにはつきりしたものが多く、決めかねているとかの話だが、お互に昔から言い伝えもあり、伝統もあり信じているのであるから、関係のない他所者に想像やあてずっぽうで決めてもらいたくないものだ。

兎に角、小野天皇もいいところだと感じていた様に、昔から小野路は、多摩川と鶴見川の分水嶺になつて居

り、風土環境よし、山紫水明にして風光明媚な地だつたに違いない。此の様に風光絶佳の地であるので、山峠の谷々には人々が居を構え、部落が形成されていた。そして部落が集まつて小野路となつたのである。その小野路を大きくわけて、宿方面、別所方面とされていた。終戦後、農業会が出来、運営上、宿近くを第一実行組合とし、下堤・別所・瓜生を第二実行組合とし、宿より上方を第三実行組合として、便宣上小野路を三つに分けて今に到つている。明治二十二年頃はこの小野路は神奈川県だつたらしい。私の家の土地権利証に武藏国神奈川県小野路村と書いたのがあつたが、火災で焼けてしまつた。其の後東京府になり鶴川村となり小野路は大字となつた。

当時鶴川村は、今の町内会が形成されている通りの、小野路、野津田、大蔵、金井、真光寺、広袴、能ヶ谷、三輪の八つの大字で形成されていた。其の内小野路の面積が一番広く八つの部落を合せた、鶴川村の四分の一ある。鶴川村が二方里、小野路が一方里と言われていた。

此の小野路の区域内には数多くの部落があり、第一には新屋敷・下宿・上宿・谷戸・台があり、第二には下堤・上下別所・瓜生があり、第三には大向・石久保・一本杉・平久保・萩久保・中尾とがある。又山山谷なので、それにちなんだ地名も多い。中でも面白いのが沢と付くのが七ツ、久保と付くのが八ツ、谷戸と付くのが十二ある。

沢では 富士ノ沢（大向） 栗ヶ沢（別所） クグツ沢（新屋敷） 半沢（台）

榎沢（下堤）『この七沢の内私が調べても見、年寄達にも聞いてみたのだが、どうしても五沢しかわからない。知つて居られる人が居たら教えて頂き度い』

久保では ピリ久保 オニ久保 石久保 大犬久保（別所） 大久保（馬場）

相談久保（一本杉） 小孤久保（新屋敷） 女郎久保（大向）

沢の谷戸（万松寺谷戸） 万松寺谷戸 清田谷戸（大向） 長谷戸（別所）

柳谷戸（別所） 池の谷戸（別所） 細谷戸（別所） 穴の谷戸（一本杉）

堂谷戸（新屋敷）

ケゾウ谷戸（大向）

瓜生山谷（瓜生）

小谷戸（別所）

地名については、昔、文字の出来た時分か、出来なかつた時分か、そんな時分に、そこに住んで居た人達によつて付けられたのが大部分で、漢字のあてはまらない所がある。新屋敷にクグツサワと言うのがあるが、クモッサワと云う人もある。今だに漢字があてはまらないので、カナになつてゐる。無理に漢字をあてはめると、変なものになるのがある。ビリ久保とオニ久保がそれで、ビリ久保を平久保、オニ久保を萩久保と漢字をあてはめてあるが、平と書いてビリとはどう考へても読めないし、オニを萩と書いたんでは、土地名とゴロが合わない。思うに、土地で云いならわした言葉に、無理に漢字をあてはめる事はないのであって、カナでいいのではないか。しかし、オニもビリもやがて消える運命にある。多摩ニュータウンに編入され、一本杉が南野になつた様に、やがては豊ヶ丘、落合になるのだろう。瓜生しかり、池の谷戸、穴の谷戸、相談久保もそうである。

以上の様な名の付いた所があつたが、今では多摩ニュータウンに編入されたり、畑や田圃も作らなくなり行かなくなり、言わなくなつてしまつたので、知らない人が多くなつてしまつた。

此の外に八歳の神と言つてダンゴ焼きをする場所が八ヶ所あつたと云うのだが、今数えてみると九ヶ所になつてゐる。これは台と谷戸が以前は一ヶ所だつたのが、二ヶ所になつたのだそうである。

万松寺谷戸、台、下宿・新屋敷、上宿・大向・一本杉、萩久保・平久保、下堤、別所の療上、療下、瓜生となつてゐる。

昔の人が家を造るのには三つの条件があつたのだそうだ。

第一に水に不自由しない事。第二に日当りのいい事。第三は風の当らない事（これは南からの台風と、北からの寒い風を意味しているのである）。

此の条件が備えられなければ、家を建てなかつたそつである。その中でも特別に人の羨やむ様なのがある。小野路には「三暖」と言うのと「三寒」と云う所がある。界隈切つて寒いと云う事でそれが三ヶ所づつある。

三暖と云つて特別に暖い所は、下堤の屋号富田屋と云つて島野さん宅と、別所中村の屋号芝土手と言い大沢さん方、もう一軒は万松寺谷戸の家号日向といい小林さんの三軒を「三暖」と言つてゐる。いづれも南北が並んでいて、一日中陽は当たるし、裏は山を控えているので北風など來ない。それに裏が山なので水には不自由しない。南の方のはなれたところに山があるので、台風の時など素通りの様に行つてしまつ。又、三寒と云うのは向坂上の一里塚のあるところと、土橋と云つて今では多摩ニュータウンの中に半分入つてしまつてゐる。もう一ヶ所は湯舟と云つて、現在は新鎌倉街道になつていて五反田と云うバス停のあるところをいうのであって、この三ヶ所は昔から北海道風が吹くと云われていて、それは寒いところである。昔はこうしたところには家を建てなかつたのであるが、今では平氣でそんな事に頓着しない。山があればわざわざくずしてしまつて家を建てゝいる。水がなければ水道を引けばいいのであるし、寒ければ炬燵もあれば暖房も出来る。風に困れば堀を作ればいい。金さえだせばどんなにでもなる。しかし、昔はそうはいかない。地の利を生かすより他ないのである。そこに生活の智恵と云うのが生れてくるのである。

山あり谷あり平野ありと云う立地条件に恵まれてゐるので、各部落に根を下した人達の子孫がその部落にそれぞれ自分達の心のよりどころとして、信心信仰する神や仏を祭つてゐたのであるが、明治四十三年の合祀令によつて小野路に一ヶ所小野神社に合祀されたのであつた。其の時の合祀帳を見るに、本社として小野神社、末社として天満宮が境内に祀られている。他に各部落から十三社が合祀されたとある。その十三社を部落別神社名を見るに、

熊野神社（別所）末社として巖島神社、八坂神社、稻荷神社、三峰神社があり、東光寺の上にあつた

（南紀の熊ノ神社が本社だと云う）

子の神社（下宿）大国主の命が祭神でうしろにあつた。

諫訪神社（中宿）

天満宮（中宿）

八満神社（新屋敷）

稻荷神社（大向とうかん森）

浅間神社（大向富士の沢）木花咲彌姫が祭神

末社として愛宕神社、前浅間神社、小御岳神社、他に祠が八ヶ所あつたが処分されたと言う。

諏訪神社（中宿）

日吉神社（向坂）

日吉神社（石久保勝さんの裏）大山咋の命が祭神

稻荷神社（瓜生）

日吉神社（下堤）

熊ノ神社（下堤）

この様に神社が各地にあるのは、川崎市岡上に山伏谷戸と云う地名が残っているが、昔ここに山伏が居て、各地に神社を広めたのではないかと言われている。

昔仏教が盛んな頃、各地に国分寺が建てられたのだが、今の国分寺に国分寺があり、そのお寺がなくなつて後、その土台石を貰つて来たのがお宮様の境台に大杉があつたのだが今は切られその根が残つて居り、その根本のところにある。神社の境台に仏閣の物がと不思儀に思えるのだが、昔は神仏混合と言つて神様と仏様とが一つ所に祭られてあつたのだつた。明治五年に分離令が出て別になつたそうだが、その命令がとどかなかつたところでは今だに一つ所に祭られてある。埼玉の飯能にある竹寺に行くと、お寺の入口に鳥居が立つてゐる。此の様なところが各地にあるらしい。

その国分寺の石のあるところには以前薬師様があつたところだと言う。国分寺には薬師様が祭つてあつたので、小野路の薬師様があつたところに置いたのだろうと、神社総代の小島登さんは言つてゐる。

又、小野路には、力試し石と言うのがあつて、これには面白い昔ばなしがある。若い衆が八王子に遊びに行つた帰りに、落合の三本松を通りかゝつた時、落合の若い衆が大きな石で力くらべをしていたが、仲々担げないのを見て笑つたそりだ。すると落合の人達が怒つて、小野路まで下さず持つて行けたらやると言ったので、三人で代る代る肩から肩へ担いで持つてきてしまつたと言う。落合の人達も小野路境までついて来たが、あきれかえつて帰つてしまつたと言う、その思い出の石が、前の青年の運動場で、今の石川工務店の物置きになつてゐるその裏の方にあつたのだが、昨年五十二年の九月、小島登さんが先達で小野神社に持つて行き、いわれ書きをして保存されている。因にその石を私も若い頃持つてみた事があるが、渾身の力をふりしぼつてやつてみたが残念な事に持ち上らなかつた。その石は三十六貫はあるだらうとの事だが「色男金と力はなかりけり」などとみんなにひやかされた覚えがある。私が見ているところで一気に担いだのは萩生田徳治さんと言つて小山に婿に行つてゐる人一人だけだつた。

寺院も下堤には岩子山千手院、別所には別所山東光寺、大向には松寿院、万松寺谷戸には小野山万松寺等の寺院がある。

岩子山には薬師様と觀音様があり、先年の御開張の時は大変にぎやかだつた。又、八月十七日には觀音様の縁日があり、店が出たり、上方の觀音堂のところでは、お坊さんの話があつたりして子供の頃、その日が來るのが待ち遠しかつたものである。この觀音様は奈良県にある長谷寺の末寺と聞いている。別所の東光寺には久しい間住職が居なかつたが最近多摩市の寺方から住職になつて来て居るそうである。万松寺は鎌倉健長寺派であり、寺誌によると六〇〇年になるとかの話である。松寿院は明治初年火災に逢い焼失、其の後再建されず跡だけ残つてゐる。松寿院には左甚五郎の龍があり、夜な夜な水を飲みに出かけたとかで恐れられていたそりだが、焼けた時は、その龍は誰かに持つて行かれた後だつたそりだ。龍が居たら火災を免れただろうとは昔の人の考え方だ。この松寿院は私の家の菩提寺で今は墓地だけになつてゐるが、このお墓の所有者達にまつわる話がある。この壇家達の家に次々と悪い事ばかり続くので、易を見てもらつた人がいるのだが、それによると、昔戦国時代小田原城が豊臣秀吉によつて滅ぼされ、城主は切腹させられてしまつた。その家臣に某がいたのだが、

悲嘆やる方なく、追手を逃れてこの松寿院に隠れ住んで主家の再興を計ったのだが、武運拙く此の地に骨をうずめてしまった。その靈が浮かばれず、それが災いしていると云うのである。壇家一同相談して慰靈祭を行う事にし、観音像を作り墓地の入口のところに建て、近くの念仏衆を頼み、懇ろにとむらつたのであつた。其の後壇家人達から変事のあった話を聞かないから、安らかに成仏したに違いない。これは昭和三十五、六年頃の出来事である。

源頼朝が鎌倉に幕府を開いて天下が一応治まつたものの、まだまだ安心は出来ない。そこで鎌倉に七つの切通しを作り、外敵を防ぐ砦を築き、万一鎌倉に変事の起つた場合、迅速に鎌倉に到着出来る様に四方に道路を造り、「いざ鎌倉」に備えたのである。それが鎌倉街道であり、その鎌倉古道が小野路を通つていて、現在辛うじて昔のまゝの姿を残している。又、豊臣秀吉の天下統一が成り、徳川家康が引き継ぎ民心も安らぎ、此の時期より、神詣でや、お寺参りが盛んになり始めた。大山の阿夫利神社などへの参詣者も多くなり、大山街道も賑やかになつてだんだん整備され、三十六町（約四K米）毎に一里塚が作られ、旅人の便宜を計るようになつた。多摩市の貝取り、小野路の向坂上、忠生の山崎等作られた。塚として残つているのは近辺では、山崎にあるだけになつてしまつた。小野路でも、小島登さんがそれを復元しようと働いているが、どうか成功させて貰い度いと願つてゐる。

その一里塚に目印というか、シンボルと云うか、榎が植わつてゐる。この榎を植えるについて面白い話が残つてゐる。徳川の寵臣で大久保石見守長安という人が居つた。この人は大変器用な人で、猿樂師から出世し、金山奉行をして居つた時、金の分離法を改良したりして重く用いられたという事である。

一里塚を作るに当たり、他の街道には松杉等が植えてあるので、この街道には何の木を植えたら宜しいでしようかと御伺いしたところ、ヨノ木にせ

よ、つまり他の木を植えよと、時の将軍秀忠が云つたと云う。ところが石見守長安、年をとつて耳が遠かつたので、「ヨノ木」を「エノ木」と聞き違えて榎の木を植えたという事が伝えられている。その榎が残つてゐるのは小野路の一里塚に只一本だけという事である。

この榎の事について前に市役所発行の町田の文化財と云う本が第一集から第十一集まで出でているが、その第二集の十九頁の中段に小野路の一里塚には榎はなく、若櫻がしげつてゐると書いてあつたので、市役所に行き、あれは若櫻ではなく榎なのだから訂正をしてもらいたいと申入れた事がある。

この度「町田の歴史をさぐる」と云うのが市役所から発行され、それにも同じ様に若櫻と記されている。榎と櫻と見わけがつかない事はないと思えるので、よく見ないで、調べもしないで前にも書いてあつたからと云つて、事実と違つた事を書かれては困るのである。ましてや権威ある市役所発行の本にである。あの木を櫻と云う者は小野路には一人もいないだろう。櫻なら秋になつて赤い実はならない。

昔は旅人の一時の憩の場であり、又その実で一時の飢をしのいだとも云われていた。あの榎は終戦後大木であつたのを細野寿さんの所有地であつたので、石丸栄吉さんに切つてもらつたところ、その木に「ツタウルシ」がからまつていて、石丸さんがその「ツタウルシ」にかけて難渋した事があつた。今の榎は切つた根元のところから出た芽が大きくなつたもので、何本もの木になつてゐるが三十年位経つたものであり、櫻の木ではない。

大山街道に向坂と云う坂があるが、急な坂で上り下りには随分難渋したものだつたが、今では新道が出来てアスファルトになり、昔の様な難所ではなくなつた。その旧道の所に日限地蔵と言うのがあり、日を限つて願をかけるのであるが、その願をよく叶えてくれると言うので、近隣に評判がよく随分流行つたものだつた。そこには三体の地蔵さんがあつて、安産の地蔵さん、イボの地蔵さんと日限りの地蔵さんであるが、今でも深く信仰され、新しい旗やよだれかけ等が上げられてゐる。又、世田谷と入つた旗もある様に、方々に信者が居るらしい。戦時中、八王子市の由木の萬蔵院に石の地蔵様があるので、懇望され萬蔵院に出張し

旧鎌倉街道



て信望を深くしたとの事だつたが、現在は三体とも元の所に鎮座している。

大山街道が大山道師の往来で賑わっていた頃、小野路の宿には旅籠がたくさんあり、いつも賑わっていたとの事である。大山道師とは、大山の山下に宿坊と云うのがあって、大山に参詣に来る信者達を泊めたり、御世話をする坊さんの事であるが、各宿坊を通じて講と云うのがあり、その講と大山の神社との間を往復し、いろいろと便宜を計る坊さん達の事を云うのであるが、当時は参詣に行く人達全部を大山道師と云つていたらしい。私が小さい頃は旅籠が何軒かあった。米屋、角屋、福島屋、池田屋等は残っていたが、其の後全部新築され、元の家は一軒もない。其の他、中屋、煙草屋、河知屋、万充屋、万年屋等もあつたらしい。

現在は小野神社の境内になつてゐるが、その一段低くなっている所に円応寺と言うお寺があつたのだが、私が小さい頃大きな櫻の木があり、上り下り出来ない様な崖であったが、お宮様の敷地になり今は神樂殿が建つてゐる。そこに一坪位の神社の敷地が張り出してあつたそうで、そこに鐘撞堂があつて、そこにあつた鐘を戦争に使うため持つて行かれてしまつたのである。

昔鎌倉時代から江戸時代にかけて扇谷に上杉家があり、上野越後にも上杉家があり、双方共勢力がありいつも戦つてゐた。ある時扇谷の上杉家の方で、小野路の鐘を陣鐘として持つて行き、帰りに逗子まで持つて帰つたがそこに捨ててしまつた。当時の代官が処分に困つて逗子の海宝院と云うお寺にあづけてしまつた。それからはその海宝院のものになつてしまつた。その鐘には小山田保小野路県と言う事が書かれてあり、小野路の鐘であることが立証されてゐる。当時保とは郡を意味し、県とは村の事だつたらしい。それを神社総代の小島登さんが氏子一同の署名をとつて返還の要請書を作り、持つて行つて交渉したが取り合はず、逗子の市役所を通じて話して貰つたがだめだつたとか。因にその鐘は神奈川県の文化財に指定されているとの事である。その鐘は時を告げる鐘だつたそうで、お寺の吊鐘の様に大きなものではない。

徳川家康がフグに当つて死んだとか言われてゐるが、その真偽の程はわからない。兎に角、九能山に埋葬され、其の後日光に分骨埋葬されるに当たり、本行列は東海道を進み、裏街道である、大山街道を本骨が通つたのであるが、小野路まで来た時車の輪が毀われてしまつた。それを小野路の者がなおしたが、その功により助郷を免除されたと云うことが文献によつて残つてゐる。助郷とは殿様の通る時、荷物の運搬から行列の御世話をする事であり、土地の人は代り番こでやつてゐるものらしい。尚、その当番の事をオテンマと言つていて大正の初期何かの番が廻つてくると「オテンマだよ」と年寄り達が云つてゐるのを思い出す。正式には小野路分ではないが、台部落のすぐとなりにコウセンバというのがある。そこには小さな祠がある。このコウセンバと言うのは町田市内に四ヶ所あつたらしい。町田市史によると金森にあるのが一番古いとあるが、他のは石塔らしいがここのは祠がある。土地の年寄に言い伝えなど聞いてみると、コガシ（大麦を煎つて粉にしたもの）にむせて死んだお婆さんが居たのだと言う。しかし、方々にあるコーセンバともみんなコガシにむせて死んだ所とは思えない。何か外の意味がある様に思える。

小野路には城山と云う所があつて城の跡がある。現在は天王様と言つて七月十五日には近所の人達によつて祭祀を行つてゐるが、祭神は牛頭天王で須佐之男命である。近くの人達は蛇を退治した神様だと云つてゐる。此の事についての伝説がある。

城跡には二ヶの祠があつたのを一ヶ所に寄せ祀つたところ、いろいろと変事があり、疫病がはやり困つた事があつた。そこで易を見て貰つたところ、二ヶの祠は蛇の神様だつたそだ。これを一緒にしたんでは無事にいく訳がない、そこで又別にしたとか、今行つてみると右後方二十米位はなれたところに小さな祠がある。それが蛇の神様なのだろう。

尚、疫病にかゝつたところでは、絶ちと云う事をして平癒を祈願したと言う。いまでもその「絶ち」を守つてゐるところがあると言う。この「絶ち」と言うのは神様に御願いするのに、「何はしません、何は食べませんから治して下さい」と神様に約束して癒してもらうのを、交換条件としたのである。こうされると神様だつて動かざるを得ないのである。今だに「絶ち」を実行してゐる家があるとか、迷信だと笑つて過ごせない切実なものがある。

此の城山は小山田小太郎有重の出城だったと云われているが、子孫の高家が楠木正茂、新田義貞などと足利尊氏と戦った折、義貞を助けて自分は戦死してしまった。その家臣が小山田の里に高家の骨をうずめ、台と云う所に住みつき田極と言う姓を名乗つたと云われ、現在の台部落の人達はその子孫だと云われている。

城山から見るにコウセンバのところは重要な地点だったので、関所があつたのではないかとの見方もある。関所は通せんぼであり、それがなまつてコウセンバになつたのではないかともつともらしい見方をする向もあり、コウセンバはつまり関所であり、関が喉になり、風邪の神様という事になつて、今行つてみると湯のみやキュース等が散らばつて居り、風邪を引くとお茶を上げに行くのだそうだ。

城山の裏下の小山田に向う道の右下のところに、小町井戸なるものがある。小町と言う名については、色々な話や伝説が残り各所にその名があるが、この小町井戸は平安の頃の小野小町に關係がある様だ。私は大勢の人達と小野路を歩き、この小町井戸へも度々案内するのだが、余りにもよごれているので、氏子の人達に掃除をしてもらう様頼んでおいたところ、先年きれいに掃除してくれ、萬松寺住職柴崎敬嚴氏によつて立札が建てられ、その由来が書かれている。それによると、ここには寺があり、仙人が住んで居り、薬師如来をまつり、この仙人が出したという小町井戸の水は仙水と言われ、いかなる干魃にも水が涸れた事がなく、又仙水と呼ばれるこの水は万病にきくといわれていた。小野小町が悪病にかかり、この水が効くというので、ここに籠り千日の間療養して治つたと言う事が書かれてある。小野小町について色々と調べてみたが生死の程はさっぱりわからない。

百人一首には、

「花の色は移りにけりな徒らに
我が身世にふるながめせしまに」

とあり七十六番目になつてゐる。

小町井戸の水は一年中涸れた事なく、又、台部落に住んでいる所は高台のため水がなく、この小町井戸の水を常用していたと言う。

しかし、台部落から小町井戸までは一K以上もあるので、水汲みには大変だったらしい。飲料水から風呂の水までこの井戸から汲むので水汲作業は男衆の仕事だったそうである。今では市の水道が入り大変楽になつた事だろう。しかし、水の尊さは今でも忘れず、一旦使つた水でも必ずほかのことに使う事を考えるそ�である。

小町井戸から流れ出る水が二十米程流れて滝になつてゐる。

滝の下は竹藪で萬松寺の持山だが、広い竹林で森閑としている。



万松寺の竹林

滑土の崖をターザンまがいに藤蔓に纏まつて下りると、深山とう感じがして、頭の上で鳴くきじの声にもびくりとする程である。大きな竹が無数にあり、上は竹の葉が覆つてゐるせいか草も余りない。最近尺五寸もある竹は余りないのだが、ここにはたくさんある。竹藪の下は萬松寺谷戸と言つて田圃になつてゐるが、この田圃は底無しと云われ、田植の時など、田の中に入れてある渡り棒の上を渡りつゝ仕事をするのであるが、踏みはずすと大変、ずぶずぶ入つてしまい、最後には大蔵の弁天耕地に出るといわれていた。しかし、今では弁天耕地もうめられてしまつたので出る所がなくなつてしまつた。城山の東と西がこうしたドブ田があり、北

小町井戸の滝



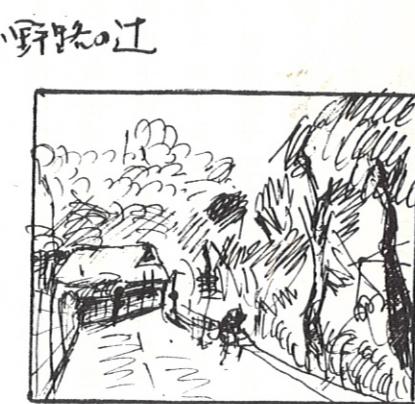
方小山田面には壕の跡があり、南の面にはコウセンバがあり、天然の要塞になっていたのであり、一応は城としての形態になつてゐる。城につながる事で乗り越えや馬場と云う地名も残つてゐる。

小野路の宿の中程から右に入る道があるが、それが大山街道である。入口の坂が合いの坂と言つたらしいが、今では関谷と呼んでいる。只、家名で合いの道というのが残つてゐる。その切り通しの坂を上つて行くと子育地蔵が建つてゐる。台座は新しいが地蔵様は古いらしく、子供を抱いた柔かな顔をした地蔵さんである。この地蔵さんのお籠りと言うのがあって、私のまだ小さい頃、芝居の奉納があり、見に行つた事を覚えてゐる。このところが大山街道と鎌倉街道の交差しているところであり、こここのところに関所があつたのではないかと思われる。関谷の名が残つてゐる所以かと思う。

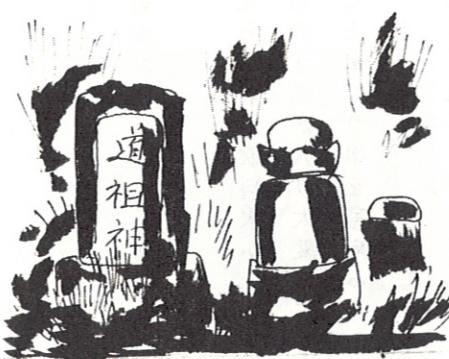
このところに大山街道と書いた石（十五粁位の角で長さ四十粁位）が土手のところに立つていたのだが、四、五年前誰かが持つて行つてしまつた。そうしたことが各所に起つてゐるので困る。先年多摩ニュータウンが出来ることになり、一本杉に行き人様と言う地蔵様があつたのだが、大向の勝さんの所有だつたので、勝さんは自分の近くに持つて来て安置したのだが、これも台座ごと持つて行かれてしまつた。勝さんでは警察にお願いして探して貰つてゐるが、まだ見つからぬようである。

この行人様とは、大向から女郎久保の上り口のところにお寺があり、そここの住職で僧都とかの位の坊さんだつたそうだ。又、昔は村を邑と書いた時期があつたらしく、小野路邑と正面に書いてあり、右八王子、左小山田と書いた石の道しるべがあつたのだが、これもいつの間にか失くなつてしまつた。いかに個人の物でないにしても、他人の物は他人の物、それに土地のものはその土地にあつてこそ生きるもので、いくらすきだ

からと云つても他人のものを勝手に自分のものにされては困る。ましてや仏様や地蔵様を盗んで行つては、罰があたつて、ろくな事はないだろう。



小野路の辻



辻と云う地名は方々にあるが、上宿と大向の境のところも辻と云う名が今だもつて残つてゐる。此の辻は八王子と府中に行く道の分岐点になつていたらしい。以前はこの辻のところに庚申塔と道祖神があり、その道祖神の両側に左八王子道、右府中道と書いた道しるべになつてゐるのがある。この八王子道は私も子供の頃、親達に連れられて通つた事がある。今大変有名になつてゐるシルクロードと言う絹の道に通じてゐるのである。今は中途が所々切れてしまつてはいるが行けない事はない。この道祖神と庚申塔は二百米位はなれたところの道の端に建つてゐる。昔から辻と云うところは若人達のたまり場、寄合所になつていて、その若人達のエネルギーのはけ口が相撲とか、力くらべ等が当然の様に行なわれてゐた。その力くらべの対象になつたのが庚申塔であり、道祖神だつたらしい。それを担いでは歩きしているうち、とうとう現在のところまで持つて行つてしまつて、そのままになつてしまつたと年寄達に聞いた事がある。今の場所だと、道祖神に書いてある道しるべの標示とも違うし、殊に道路の端なので、マニアに見つかると持つて行かれてしまうのではないかと心配されるので、元のところに持つて行こうとしたが、道形も前と変つてゐるし、地主も「うん」と云つてくれないのでそのままになつてゐる。

地名で面白いのが別所には「ソーメン」坂と云うのがあるが、御想像通り細くて長い坂である。今では新鎌倉街道が下を通つてゐるので、このソーメン坂を通る人は少くなつてしまつたが、昔はこれが本通りであつた。此の坂の上には戦前は在郷軍人会というのがあり、鶴川地区の分会長をしていた小川源之助さんのがある。この小川さんは二等兵の分会長と言うので都下で有名な人だつた。二等兵とは軍隊では一番下の

階級であり、軍隊に入隊すると二等兵だったのである。会長ともなると、五階級も六階級も上の人があるのが通例だった。兵役検査で甲種合格になつても籠逃れと言つて兵隊に行かなくともよかつたのだが、小川さんは特別教育と云つて六ヶ月の軍隊生活をしたのだった。それで二等兵になつたのだった。小川さんは軍隊生活はみじかいけれども、若い頃より役場に入り会計を長くやつて居られたが、後、村會議員をやり、町田市になつて市議会議員に当選、市議会議長も務められた人である。分会长におされたが其の後、補充教育を受けた時、分会长が二等兵ではと言う事で、各方面からの陳情などもあって一等兵に抜擢されたのだった。

関谷の所で分れた大山街道と鎌倉街道と又出合う所に、ウマステ場という所がある。そこには馬が死んだ時うめたと言う。そこから右の方へ上つたところが焼場と云つて、悪い病気、つまり、伝染病で亡くなつたことがある。その時の光景は今だにまぶたの底に残つている。そこには余り人が行かないので、孤やたぬき、むじななどのたまり場だつたらしく、よくだまされたり化かされたりした話が残つてゐる。よく孤は女人に化けるとは聞いていたが、女人が通る時は好い男にも化けるそうだ。孤の灯燈やむじなお月様の話は子供の頃よく聞かされたものだ。ドンドンのびっこ孤の事はみんな知つてゐる。しかし、この焼場も多摩ニュータウンに編入され、丸太をならべたくぼみ等もなくなつてしまつた。

明治四十二年政令により合祀された神社の内に浅間神社と云うのがあり、この浅間神社の祭神は木花咲彌姫であり、神武天皇の后であつたと言う。此のお方には三人の子があり、オスセリノミコト、ヒコホホデミノミコト、オアカリノミコトであり、火山富士の山神、つまり浅間神社の祭神として祀られ、又三人のお子を一遍に産んだので、安産の神とも言われるそうである。二十年程前小野神社の御興堂の中に、浅間神社の御姿がころがつてゐるのをみつけ、浅間様の御姿を粗末にあつかうとして、前の浅間様の氏子達がおこり出し、とうとう、小野神社から持つて行って前の浅間様の境内の浅間山に祀つてしまつた。そして六月一日の縁日にはお祭りをしていたのだが、昨年（昭和五十二年）神社の調査があり、其の事がわかり、そのままで

はいけないと言うので、小野神社の末社として別祀する事になつた。氏子達は大喜びで盛大にお祭りを行つたのである。

昨年までは六月一日と決つていてお祭りだが、世相も変り、浅間様の日には年寄り達に踊りをみせたり、茶菓の接待もし、敬老の意と、婦人達の自分達の踊りの披露なども含んでおり、昔から浅間様の縁日シンボルである大福餅の販売など、いろいろの意味を持たせてあるので、なるべく参詣者の多い日というので、六月の第一日曜と今年から決つてしまつた。

此の浅間神社は境内も広く、以前は大きな木が生い茂り、昼でも暗い状態だったそうである。昭和の初期小野神社が改築されたのだが、此の浅間神社の木が大きなウエートを占めてゐるそうである。私の曾祖父の時代、天狗様がいて随分おどろかされたとの話を聞いた。昔は下から登つたのであるが、今は下から行けない。男坂と女坂があつたのだが、現在は男坂はなくなつてしまつた。台風の時、土手がくづれてしまつて、女坂だけが残つてゐるが、かなりの急坂だ。神社の下の方にはミタラシと言う滝があり、小さい池がある。そこの水はどんなに日照りでも水の涸れた事がないといわれてゐる。その水は諸病に効くといわれ、遠くから御水を頂きに来たという話である。この所は人里はなれた深山溪谷を思わす静かな淋しいところで、大木のすれ合う音にもびくりとする程である。小野路は名所で花が咲くとはじめに言つた様に、小野路は文化の中心であつたらしい。明治になつて飛脚から郵便になり、郵便局が出来たのも早く、近隣では小野路しかなかつた。その配達区域も広く、鶴川全域は勿論、多摩、忠生、黒川方面まで行つたのである。私が青年の頃臨時に頼まれ行つた事があつたが、四、五人でこれだけの区域を回つたものだつた。それに登記所があつた事も自慢の一つになる。今の公会堂がそれだが、今だに登記所と言う人もある。登記所は八王子と府中と小野路だつたので、小野路は有名だつた。それが世が変り、時代の流れには勝てず、陳情や嘆願を何回やつても無駄で、登記所は町田に行き、郵便局は大蔵に移つてしまつて、自慢の種がだんだん減つてしまつた。

登記所がある時分は町田から小野路までバスが通つていて、それは便利だつた。今は亡くなつてしまつた

が、大蔵の横溝勘次さんがバスの運転手をしている時、よく小野路まで往復してくれたものだつた。

小野路名所として特筆大書したいのが、小島資料館である。小島家は素封家として知られ、代々書をよくされ、剣もたしなみ、代官などとの往来もあり、古くからの書物もたくさんあり、これ等をシミの餌にしておくのはもつたないと、現主小島宗市郎氏と御子息、家人らと三年もかかり整理され、それを一般に公開しようと先年資料館を作り、月の第一日曜と第三日曜を開館日と決め、一般に公開している。保存料として一人三〇〇円をもらっているが、当日は館長みずから案内説明をしてくれる。

門を入つたところに博愛の池があり、渡月橋と言う橋を渡ると右に小高い丘があり、そこには時雨亭という東屋があり、休憩にはもつてこいの場所であり、その上バラエティーに富んだ庭全体がながめられる。時雨亭の下にある大きな石は門から入らないので、門をこわす間三日もトレーラーにつんだまま道路に置いてあつた。池のそばにある燈籠は上野の寛永寺にあつたと言われ、彰儀隊で有名な上野の戦争の時の鉄砲の弾痕が残っている。小島為政氏の像が時雨亭の下にある。この人は新選組隊長近藤勇とは剣友だったそうである。左手奥には近藤勇の像もある。資料館には昔からのいろいろの書き物、書籍類、諸道具が所せましと並べられてある。特に新選組に関するものが多い。こうしたものを個人でしかも私費で作られた事は、近年まれにみる快挙と私達は感激せざるを得ない。小野路の自慢話の最たるものである。

最近、昔の古い物が見なおされ大事にされ、珍重される様にはなつたとしても、戦後の混乱した一時期、何もかも昔のもの古いものとして、一蹴され、大切にしていたものがなくなり、毀されてしまつたり、又、人口増による土地開発が進められ、田が、畑が、山が、木が、草がどんどんなくなつてしまつたことは、いかに時代の流れ、世の推移とはいえ悲しい思いがする。

私達が小さい頃山に行くと、いたるところにデディババア（シュンラン）があり、その花で首取りをしたり、ネコ（タマノカンアライ）の花で遊んだりし

たものだつたが、今では残り少なくなつて宝石視されようとは夢の様な気がする。エビネラシやネジリンバナ（モヂズリ）もそうだが、みつけるとみんな根っこから持つて行つてしまつ。花泥棒に悪い人はいないと昔から言われているが、そうかも知れないが自然のものを、数少ないものを自分の中にてしまふなんて余りよくないと思う。

先日町田博物館の館長さんに虫の旧名を聞かれたのだが「カガミツチヨ」や「カンペイ」「ママッコ」などの名前はなつかしいものだつた。今でも居るがだんだんいなくなつてしまつだろう。

東京都内であつても、市街地調整区域になつてゐるため、思い切つた開発もされないので、昔のまゝの姿が残つてゐる。私はいつもそれを自慢にしているのである。



例川草



例川草

追記

書き足しておきたい事がございます。

大山街道の道識るべが小野路石油のガソリンスタンドの端に二ツに折れてころがっているのがあり、極く最近のものだが、唯一つの思い出なので、当主細野寿さんに建てゝもらう様御願いしておいたところ、先日立派に補強されスタンドの端に建てゝ下さいました。有難度うございました。

あとがき

私が小さい頃より話に聞かされ、教えられた事を記憶を辿つて綴つてみた。それは或は、話だけのものだつたり、必要以上に誇張されたものだつたり、そんな事をと思う事もあるだろうが、私はそれをそのまま綴つてみたもので、私自身それを絶対のものと思つてゐるわけではない。只、昔の人が昔の事を語り伝えようとして残してくれた昔話がだんだんとぎれ、千切れてしまい、しまいにはなくなってしまうのを惜しいと思つたからである。

尚、そうした事は私の知つている事の他にたくさん的人が知つていると思うのである。それをみんなが出し合つたらすばらしい郷土物語誌が出来るのではないか、そんな事を考えながら綴つたのである。

これを出版するに当り鶴川第一小学校校長中島典高氏には巻頭に御言葉を、教頭山本隆一氏には表紙題字を、又、小野神社総代小島登氏には小野路に関する古事記等、そして本文中のカットは、図案家手嶋琴さんに頂きました。

尚、校正から印刷までの労苦を園部芳徳君が引き受けてくれました。こうした方々には心から御礼を申上げます。他に多数の方々に助言や御指導頂きまして誠に有難度う存じました。衷心より御礼申上げます。

昭和五十三年二月

萩生田 長吉

筆者略歴

萩生田 長吉

大正 三年七月

昭和 四年三月

昭和 十九年六月

昭和 三十八年五月

町田市小野路町四二四三に生まれる

小学校高等科を卒業、農業に従事

海軍に応召 二十年八月復員

町田市立学校警備員として勤務

鶴川第一小学校に在籍、その間伝統のめかい作りの研究および技術の保存、指導などをを行い現在に至る

現住所
電 話

東京都町田市小野路町四二四三

〇四二七（三五）一八一八

昭和 56. 9. 10.
著者より蔵贈さる